



一条の煙

夕暮れの浜辺を散歩中
五歳の息子が
三歳の娘のその手を引いて
耳打ちした

あれがヨウコちゃんのおとうとだよ

息子の指差すその先に
誰かが消し忘れた焚き火から
一条の煙が
こっそりと手繰られた糸のように
空へ吸い上げられていた

二年前
今日のような空と海が
同じ色をしたその日
彼は名前のないまま死んだ

当時三歳の息子は確かに訊ねた
赤ちゃんはどこへ行ったの

その時私は
火葬場から上がる
わずかばかりの
本当に少量の
白煙へと視線を促したのだった

沖からの柔らかな潮風とともに
家で留守番をしている妻から
私の携帯電話へメールが届いた

さっきおなかの中ではしゃいでいたわ

私はただただ彼を待ちわびていた

波打ち際で

いつの日かの波が

私の足元を濡らす中

その波が息子と娘をも

浸さぬように

両腕でしっかりと抱き上げた

娘はその小さな口を

ぽかんと開けたまま

まだその一条を

見つめていた